

The Mikado's Empire

出版の反響

山下 英 一

グリフィス (William Elliot Griffis, 1843~1928) の *The Mikado's Empire* (以下MEとす)。なお『皇国』という書名の使用は避けたい(は1876(明治9)年、ニューヨークのハーバー&ブラザーズ社から「探検、旅行、冒険」シリーズの一冊として出版された。確かにこれは日本旅行記と言われなくも無いいくつかの面がある。ME初版は全体で625頁あって、それが二部構成になっている。その第一部はグリフィスの日本体験記風な文章だが、「紀元前660年からキリスト紀元1872年までの日本の歴史」という題のついた第一部にも随所にグリフィス自身の日本国内旅行の文章が見られるからである。そうは言っても、MEの本領と目すべき第一部は通史の形を取った歴史書である。グリフィスは今日のいわゆる歴史学者ではない。強いて言えば、歴史作家といえなくはない。その最も大きな特色は、グリフ

イスが日本をその内側からだけでなく外側との関係において、世界史に組み込んで見ている点である。その上、グリフィスが日本に居た1870年末から1875年7月ごろまでの、特に福井、東京、横浜での生活体験を歴史的臨場感として記述に取り入れている点である。

前置きが長くなるが、MEの評価にもかなりまちまちの見方のあることは否めない。しかしそれが必ずしもマイナスに働くとは限らない。その時宜を得たものにME出版後、各種の新聞、雑誌にジャーナリストの書いた *critical review* つまり紹介文がある。ただ米国においてもまだ書評というジャンルが確立していなかったために、*literary criticism* つまり本格的批評はあまり見当たらない。グリフィスはME出版の1876~7年にかけて、それについて書かれたどんな記事も可能な限り集めたようである。グリフィス・コレクション(ラトガース大学アレクサンダー図書館所蔵)にはそれらの切り抜きが130種以上も残っていてスクラップ・ブックになっている。これを読むと、大方は日本についてそれまでにない面白くて有益な本であると書いて、読者に読む気

を起こさせているようである。実際に、MEは時代を追うごとに新しい記述の補足があった版を重ね、30年の間、同時代の日本に関心を寄せる欧米人の間で広く読まれた。しかしMEが *literature* として意味をもつのは、詰るところ、それが1870年代に書かれた維新論であるということによる。

「序文」にあるように、ME出版の1876年は米国の独立100年に当たり、またグリフィスの故郷フィアデルフィアで万国博覧会(5月~10月)が開催された年であった。他方、在日中に1872、1873、1874と転換期的年代(*the epochal years*)が続ぎ、グリフィスはこれを「最も重大な時代」(*the most pregnant years*)と呼んでいた。そこで思うのは、入江 昭(ハーバード大教授)の「何が歴史の転換期か」という文章である。(『朝日新聞』掲載、2002、6、4)「世界史の流れでいえば、むしろ1870年前後のほうが、転換期と呼ばれるのにふさわしい、という見方が歴史家のあいだで影響力を増している」。世界歴史の流れをとらえることの難しさから、国によってそれぞれ別個の歴史に踏みとどまりがちである。従って、入江に

とつて上記の見方はその一国中心の歴史から解放された人類全体の歴史 (global history) のなかでとらえようとして考えられる歴史認識であった。グリフィスがいみじくも指摘した「最も重大な時代」という表現にどこか入江の伝える1870年転換期説と相通じるものがありはしないか。「序文」によると、日本の真の歴史を書くのは難しい。それは資料不足のせいもあるが、なによりも心理的な相違 (the differences in psychology) である。もつぱら日本人の精神的視差 (mental parallax) つまりその考え方、感じ方を見つけることに努めたとグリフィスは述べている。この決意のもとに *The Mikado's Empire* は白日に照らして (with the light of common day) 執筆されていた。

I グリフィスと越前福井

天の岩戸の神話に出てくる岩屋前の天鈿女命の踊りは、福井の町でグリフィスが見て楽しんだ、身振り手まねの踊りに似ていると想像する。主として日蓮宗の行事の一つ、「流れ灌頂」を府中 (武生) の近くで見て、それ

が越前の町や村で堅く守られていると知る。

この宗教的行事については「若越郷土研究」(46の1) pp11-12にある。日本と中国の友好は12世紀になって途絶えるまで親善関係にあったといわれる。その例証にグリフィスは中国からの表敬使節の船が台風のために越前沖で難破した話をあげる。記録によると、一行のうち46人が救助され、三国で食物を与えられて保護されたという。グリフィスは織田信長を書くに当たり、越知山のふもとの村、織田から話を始める。MEのなかにこのようなエピソードを入れることをグリフィスは忘れなかった。しかも一年にも満たない多忙な福井生活のなかで暇を見つけて出かけた場所で、およそ米国人読者に無縁と思われるこれらの地名を平気で使っている。

クラーク (Edward W. Clark, 1849-1907) はMEのなかのこういう日本語の使用は行き過ぎであり、歴史的簡所に一人称の話を挿入することにも批判的であった。歴史の記述に臨場感は無用というのである。一方、グリフィスは臨場感こそ読者を未知な歴史に近づけるものと考えていたと思われる。過去と現時

を結んで遠近法的に洞察力を働かして歴史を書く作業のなかで、「私」という著者自身の

顔が現れたら、読者にとつて歴史にふれる気安さといったものが出ると思っただのではないか。この二人は大学時代の親しい友人で、グリフィスはクラークを静岡藩の教師に推薦している。クラークについては「若越郷土研究」(43の1)の「グリフィスと静岡のクラーク」がある。クラークのME書評は *The Independence* 紙の依頼で、1876年の11-12月号 *International Review* に載った。徳川家の直轄地である静岡に居たことがあるクラークは、MEのなかの徳川家の扱いが無礼に取れるのが気に入った。「270年にわたってミカドより大きな勢力と影響力をもってきた偉大で愛国的徳川大君に浴びせられる辛らつな悪口、それと対照的にミカドとその政体の結実に盛られる法外な賛辞」と書いたほどである。

多くの書評はグリフィスの福井での体験がMEの中身を幅の広いものにしたと書く。1871 (明治4)年の越前福井は西洋の影響が届かない封建政治のなかに居た。ここでは江戸、横浜から遠く離れていて、日本の古い暮らし

ぶりが続いていた。*The Evening Mail* (1876、8、11)のように、すでに日本は大いにアメリカナイズされている、と書いた書評まであった。言うまでもなくこれは江戸(まだこの呼び方が尾を引いていた)、横浜に限られた見方であった。福井に居る間に廃藩に遭遇し、グリフィスの生活の場は東京へ移ることになる。このような動きを見てもお雇い外国人の招聘にいたるまでの幕府の開かれていった内情が興味あるテーマとして浮上してくる。言い忘れたがクラークの書評はこう結んであった。「欠点や間違いはあつても、*The Mikado's Empire*は日本に関する最高水準の書物として長く残るであろう」。

II クリスチャン・サイドの神学的見方

MEI出版で米国の読書界に大きな話題を提供したグリフィスは、その翌年、念願の牧師の定職に就くことになった。日本から帰国するやニューヨークのユニオン神学校で学んだグリフィスはニューヨーク州スケネクタデイのオランダ改革派教会に職を得た。実は、福井藩お雇い教師として日本に来るとき、グリ

フィスはニュー・ブランズウィック神学校の学生であつたが、ニューヨークのノックス・メモリアル教会で最初の説教をしている。ということとは牧師を志す神学生のグリフィスにとつて、日本の足掛け5年は何であつたのか。南校教頭(東京大学の前身校の校長)フルベッキから米国のオランダ改革派教会の伝道局を通して日本の教育の手助けをするための人材派遣があつたとき、その要請に応じることは日本宣教のための情報収集もその目的の一つであつたと思われる。もちろんグリフィスは熱心な教師であつたが、日本人との幅広い交際は情報集めに有利であつたばかりか持ち前の機会に鋭敏な才能を生かすことにもなつた。一書評でしばしば引用される「序文」のなかの言葉に「宮殿から乞食小屋まで日本のことで私の知らないことはなかつた」(Nothing Japanese was foreign to me, from palace to beggar's hut.)がある。この情報を前に日本という未知にして発達した異文化の国を懐手して黙って眺めている方はなかつた。日本行きに託したグリフィスの心境をそう思わざるを得ない。神学の勉強はやめたわけ

はなかつた。あえて言えば日本でのグリフィスの日常はキリスト教のそれで守られていた。このように一方でキリスト教徒の試練に耐え、他方で情報の収集による異文化研究があつて、この両面が一度に噴出することになつていった。そして直ちにMEI執筆は日の目を見、牧師の聖なる仕事へと開花した。この辺の事情についてはグリフィスの *Sunny Memories of Three Pastors with a selection of sermons and essays 1903* に詳しく。

「日本の仏教は徹底的に研究する価値がある。日本文化を構成するあらゆる要素のうちで、仏教ほど日本人の性格の形成に影響を及ぼしたものは無いからである」という意見をグリフィスはMEIで述べている。仏教の宗祖の中で、グリフィスは日蓮に最大の関心を持った。改宗への熱意、議論の厳しさ、宗派の頑固なこと、狭量な尊大さなどにおいて、他派に優り、才気のある識者、妥協しない熱狂者、怯むことのない殉教者、冷酷な迫害者を多く輩出した宗派はおそらく日蓮宗をおいてほかに無いのである。さらに徒な予言と断つて、日本においてキリスト教を妨害す

る最も活発で根気強い宗派は日蓮宗に間違いないという。内村鑑三の「日蓮上人を論ず」(1894)を想起せざるを得ない。そこに日蓮の仏教改革に対する内村の共感と賞賛が読み取られるからである。グリフィスは日蓮が入滅した東京池上の長栄山本門寺を訪ねて、日蓮の仕事や門徒たちについて感銘を受けたと書いている。福井は真宗の盛んなこともあって、MEでは開祖親鸞の生涯、教義について書き、真宗の特徴を純粹な意味のProtestantism「新教」と呼ぶ。すなわち思想と行動の自由があり、政治や伝統や超聖職主義や神道からの影響がないところが、「新教」の、強制を受けたくない精神に似ているという。グリフィスにとって福井生活の一年は神道と仏教の形態や民間伝承から多くを学ぶ絶好の機会であった。

グリフィスの倫理基準 (ethical standards) はフィラデルフィア出身のキリスト教徒に則っている。A Philadelphianであるということにはパイオニア (開拓者) を意味し、そのリーダー (指導者) の役割を演じたのが改革派教会 (Reformed Church) であった。書評もお

のずとその観点から論じたものがあって、グリフィスが自分の基準のために「異質で未知を装って現れる美德や高貴な資質にたいする判断を惑わせはしない」(Appleton's Journal)¹、或は「党派心の強いキリスト教徒としてではなく、哲学者か科学者の公正さを持つて書いている」(The Presbyterian) と評している。これに対して「グリフィスはキリスト教徒として書いた」(The Watchman) と明言するものや、「特に宣教に関する情報はあまりないが、日本人の宗教にたいする考えと生活について多くのことが得られよう」(The Occident) という Dr. Luther H. Gulick のような評者もいる。また他にも、「著者の分析と推論から神学的見方をもう少し切り離していたら、研究者にとってMEの価値は増していたらろう」(Daily Evening Post) という評言があった。しかし書評は概してグリフィスの日本歴史は分析と推論を神学的観点と混同させるようなことはしていないと見ているようである。

先述したように The Mikado's Empire は版を重ねて約30年の間、日本に関心を寄せる同時

代の欧米人の間で広く読まれ続けた。それは版を重ねるごとに新しいページ (seven supplementary chapters) が増えていったからである。4版 (1883) I. Japan in 1883 5版 (1886)

II. Japan in 1886 6版 (1890) III. Japan in 1890 7版 (1894) IV. Japan in 1894 8版 (1896)

V. The War with China 9版 (1900) VI. Facing

the Twentieth Century 10版 (1904) 2 vols. I -

VI, including history to beginning of 1903 11版 (1906) 2 vols. VII. Japan A World Power - 「若越

郷土研究」(45の1) に関係論文がある。初版の625頁が738頁になるまで日本国の変遷と共に歩んできたMEの舞台はついに幕切れとなった。しかしこれがMEの類希なる実像である。

この後引き続きグリフィスは気持ち新たに日本および日本人について執筆の構想に入り、1907年 The Japanese Nation in Evolution:

steps in the progress of a great people を上梓した。それは日露戦争を日本人の精神力の面から論じてあって、1875年に日本人を知力の面から論じたグリフィスの最初の論文 The Recent

Revolution in Japan (後に述べる) の思想に

続く「和解」(reconciliation) の精神を希求す

る書になって結実した。その思想というのは明らかに日本が Revolution (変革) から Evolution (発展) という道を通って世界の国々と伍していく開かれた高度な文明国に成長することであった。グリフィスのその考えの根底にはキリスト教の信仰 (faith) があつた。ME にそのことが反映されていて当然であらう。

それが色濃く出ていくかでないかの違いが問題になってくる。そのことについて上述の ME I *Japan in 1883* を取り上げてみると、この年までの10年足らずの間にグリフィスは日本で起こつた変化の特色を三つの点で見ている。1. (the irresistible pressure of public opinion, the keen satisfaction of the majority, the joy of the citizens and peasantry) とつた表現にみられる民権の拡大 2. nationality の勃興と隣国との領土権争い 3. (the path for success in Christian missionary labor) 活発な宣教活動。とりわけ3の項目について言うと、日本が西洋近代文明の同化に努めていることが宣教活動を促進すると述べ、聖書翻訳委員社中訳『新約聖書』完成祝賀感謝会 (1880、4、19) による聖書の普及の始まりを歎び、普通一般の学

校とミッション・スクールとが友好的な競争関係にあることを指摘している。ここでもイエスの理想が個人と国家の進歩にとって最高の励みになると述べる。グリフィスが日本人に理解してほしいことの第一は individuality (個人の存在) の自覚であつた。

III MEに見る日本人の国民性

グリフィスがMEを書いたのには地の利人の利に恵まれていたという意味のことを書評は口をそろえて言う。グリフィスが *The Tokio Guide* を出版した明治7 (1874) 年は、外国人の内地旅行の許可、不許可をめぐる議論が活発になってきた頃である。明治32 (1899) 年の条約改正までにはまだ長い年月だが、それでも明治8 (1875) 年には外務省発行の「外国人旅行免状」の交付が可能になり、外国人の内地旅行制限が少しずつ緩和されていった。実際、明治6 (1873) 年、南校教師グリフィスは夏休みの約一ヶ月を姉マーガレットと旅行をする。箱根、静岡、名古屋、京都、福井、金沢、越後高田、信濃、浅間山、高崎と歩く。MEのなかの秀吉ゆかりの「耳塚」、「日本武

尊」の苦難の確氷峠越えの文章はこの旅から得られた。もちろんこれで終るわけではなく、「耳塚」は一人の人間の野心のために払われる犠牲の重大性を指摘し、「日本武尊」は歴史上の人物であり、その行動は実際の歴史の一部で、武士道と因果関係があると説いた。つぎに肝心のグリフィス人脈のことである。

来日して福井に赴任する前に大学南校で教える。そのとき主要な大名や副島種臣、大隈重信ら有名人と知り合う。日本へ行く前すでに日本人留学生を知り、フィラデルフィアのグリフィスの家族が住む家、それはアパートの借家であつたが、手島精一 (後の東京高等工業学校校長)、柳本直太郎 (後の名古屋市長)、畠山義成 (後の開成学校校長) ら苦学生を下宿させた。ラトガス大学のあるニューブランズウィックの町で付き合つた日本人学生を通じて彼等の父、勝安房や岩倉具視が日本のグリフィスを支援するようになる。MEの校正段階ではボストン大学に留学中の斉藤修一郎に協力を頼む。斉藤は開成学校の学生だが、明治政府派遣の第一回官費留学生であつた。まだまだいろんな有利な条件がある

が、日本政府役人(公使 吉田清成)、日本人留学生(今立吐醉ら)、および日本産業の米國進出(フィラデルフィア万博)、日本趣味の人氣(Edward Greayの「日本博覧会」Japanese Art Exhibition, N.Y.)なども背景に、米国民の中に日本を東洋の最も興味ある隣国とみなす傾向も手伝ってThe Mikado's Empireは日の目を見たのである。それでなくてどうしてあれだけのものが生まれるであろうか。ついでに言う、MEに入っている大沢南谷の挿絵を除くその他のカットは出版社が用意したと思われる。

1862(文久2)年、パンペリー(Raphael Purnelly, 1837-?)という米国人の地質学者(鉱山技師)が来日した。著書にAcross America and Asia (1869)があり、グリフィスはこれを福井で読んでいた。この本は日本の宗教について書かれた最初のひとつで、「浄」の象徴としての神道は神武天皇を皇祖とする神政の基盤であると述べて、神武天皇を歴史上の人物と見なしていた。そのパンペリーがThe NationでMEを書評した。第一部を歴史上のロマンスであると評して、日本の封建時代を

「忠臣蔵」に見られる忠誠心 (the idea of loyalty) のかたまりと見ていて、明治維新は国内で蓄えてきた底力の必然の帰結であって、近年における外国人の到来という外からの介入によらないというグリフィスに賛同している。しかし「古事記」の記述を日本の正しい歴史とする愛国的な日本人や神道の熱心な信者にたいして、外国人の冷静な覚めた目には、それが皇室を高揚するために人間の作った発明にうつる」と言って、古代の天皇制度の復帰と神道の復活が固定観念化してくるとのグリフィスの懸念にパンペリーは気づいてなかつた。グリフィスがME執筆までにたどりついた神道についての考えは、アーネスト・サトウ(Ernest Mason Satow, 1843-1929; 江戸時代末期に通訳・書記官として来日、公使パークスを補助した英国人)の説を援用の域を出ない。従って「神道は日本人を精神的奴隷の状態に貶める原動力そのものである」というサトウ説に負っていると思われる。要するに「神道は宗教としての特色が殆ど無いので外国人には理解されない」という結論に達した。神道の信者にとって聖書と呼んでいい

『古事記』は物語ばかりで教義も教訓も儀式について何も書かれていないと理解したからである。にもかかわらず「MEは知力と思考力のある観察者が公平を旨とした仕事であることをはっきりと証明している」とパンペリーの賛辞は続いた。

MEには新事実が皆無に近いと言い切った書評があった。この人はMEに根っから反感の持ち主であるが、後ほど紹介するとして、これに対してThe Christian Intelligencerの意見はこうである。MEの日本歴史は推論や理論の領域よりも具体的な事実の世界に属していて、図書館からの焼き直しでない、従来の權威ある研究にあまり依存することなく、著者に与えられた機会を最大限に生かして書かれていると述べる。

ジャパン・ヘラルド (Japan Herald) のReview (Jan. 11, 1877) に書かれた文章が最も長く、それも善意ある辛口の批評のように思われる。MEは多くの専門家の研究の精巧な要約と、それに加えて著者の生活体験の記述と日本語文献の綿密な解釈からなっているが、日本に関する何か新しい宝庫の品は入っ

ていないというのである。見るところ10項目以上に亘って反証が繰り広げられているが、そのうちいくつかをMEと合わせて紹介する。①MEが日本民族の起源を原住民族のアイヌ人とするのに対して、それとはまったく違う民族が侵攻して来たとの見方が信頼されている。(この頃、日本民族の起源への関心が高まって来た。)②日本人の国民性と考えたもののうちにグリフィスは、an intensely imaginative people 見せかけに弱い国民、the love of a lie ウン好^{was}の癖、his willingness to change for the better 改善に進取なことを挙げる。ペリーの来航に続く10年ほどの間に、日本に来た外国人が日本人の特徴として最初に重要視することになったのが日本人の虚偽つまりウンであったという。ウンの行為は江戸幕府のどこにおいても執拗に見られた。しかもその実行者は個人的に驚くほど器用な才能と卓越した独創力を持った人たちであった。これは日本人が生来ウソつきということではない、対外国との垣根のなかでウソつきになったという。幕府自体が巨大な欺瞞のかたまりになって、公私にわたってウソをつくこと

が癖になっていた。グリフィスが言いたかったことは日本の政治が二重構造 (dualism) になっていて天皇が將軍のいずれに政治の実権があるのか、国交を求める外国人使節を困惑させた外交的詐欺のことであった。家康が將軍のとき外国に対して大君 (tycoon) と自称した。「大君」は「日本国大君」の略であるが、グリフィスはミカド (天皇) でないものが外国を相手に用いたこの称号を尊大で外交的詐欺とみなし、日本には支配者と呼ばれる人は唯一、天皇であって事実上の日本の統治者、家康は天皇の座を奪った成り上がり者 (parvenu) であると決め付けた。家康の天分は封建諸侯の地理的配置にあるとしながら、家康には真の意味での国家意識がなく、外国人との接触の衝撃に耐える用意がまったく出来ていなかったと見た。ジャパン・ヘラルドの評者は政治の二重構造が日本の歴史上最大の発想であるといって、その発生は天皇が仏教の政治的利用によって教権主義に転向した時代までさかのぼることをグリフィスは知らない^と論じた。③グリフィスは信長とキリスト教の背景について認識を欠いていると

いって、その例に聖フランシスコ・ザビエルの真実から逸脱した説明を上げる。明らかにグリフィスのカトリック教蔑視を疑っていた。聖フランシスコ・ザビエルがその教義の如何によらず歴史家の尊敬と賞賛的であるのは、ザビエルの自己否定、狂信的熱意、超人的精神力、犠牲と苦行の生涯によるためである。ザビエルが貿易と外交の促進のために日本伝道を放棄したというグリフィス側の主張は中傷的で不当なので、これを看過することは出来ない^と主張した。この伝来のカトリック教についてグリフィスの記述をみると、キリスト教は珍しがりやの日本人の心を惹くものであったが、仏教と同様に古い宗教であるところから危険視された。珍しがりやというのはグリフィスが日本人の国民性にあげた見せかけに弱いということである。政治の混乱に貧困という精神的土壌のなかで自国の神や仏は人々の苦悩を慰めてくれない。そのような時、カトリック教の僧侶が十字架、雄弁な口舌、豪華な衣装、儀式、秘蹟を引っ提げて現れて仏教徒の度肝を抜いた。その結果、外国人とキリスト教と鉄砲が手を取り日本にや

って来て播かれた種が陰謀、迫害、扇動、反乱、内戦という作物になって現れ、6万人の日本人の流血がその収穫であった」というのがグリフィスの意見であった。^④MEのNotes and Appendicesのところで薩英戦争(The Bombardment of Kagoshima) 1863と下関事件(The Shinonoseki Affair) 1863における外国人の武力行使にたいするグリフィスの非難は、それが誠実であるだけに一途な狙いが悔やまれてならない。コミュニケーシヨンの手段としての発砲は国際法上、世界共通の正義と常識にもかかわらずグリフィスはなぜ誤った感傷とくだらない憤りをあらわにするのかと書評は問うていた。^⑤最後にMEの読後感を次のように締めくくっている。「この読み応えのある作品は弱点がどうであろうと躊躇なく声を大にして言いたい。The Mikado's Empireはこの時代、日本について書かれた完全に真実味のある最高の作品である―充実した内容、魅力的な文章、聖火のごとき情熱」。

グリフィスの維新論というべきはThe Recent Revolution in Japan (ME第28章)は、1875年The North American Review 4月号に発表されて、

山下 The Mikado's Empire 出版の反響

すでに話題になった論文である。―参考。拙著『グリフィスと日本』1995(近代文藝社)の『維新外論』考、『日本近世変革論』考¹。

先述した政治の二重構造とウソの国民性はこの論文に出てくる問題であった。しかし中心の問題はRevolutionにあった。幕府の没落、天皇の復位、封建制度の廃止の直接の原因は外国人の到来にあるというのが、欧米の一般的印象であった。それに対しグリフィスはそのことが原因(cause)ではなくて誘因(occasion)になったと述べる。Revolutionの背景にある外国人に対しての国策の大きな変更、アジアの文明を拒否して西洋のそれを理想に採用しようとする思想は、その原因を求めれば主に国の内部から発生したもので、決して外部からでない、衝動からであって、衝撃からでないと言っているのである。(mainly from within, not from without, from impulse, not from impact)それではいったい主役は誰であったか。サムライと呼ばれる武士階級の日本人の何をthe military - literati of the countryとグリフィスは称しているが、これには加藤周一氏という「武士知識人」という言葉が似合いで

ある。というのは武士支配層のなかであって外国の文化に深く接した人をさしてそう称していたからである。主役はそういう武士知識人であった。―加藤周一「新井白石の世界」『日本思想体系35新井白石』1875 岩波書店。

書評は大きく二つに分かれる。Revolutionを外国の影響(foreign influence)と取るか、グリフィスのいう内部からの衝動と取るかである。衝動説に刺激を受けたと思われるグリフィスに賛成の書評が多いが、Boston Globeのようにあくまでも外国の影響を主張するものもある。しかし賛成の側の大方の意見は次のようであった。日本の国土に外国人が現れたからではない。国内のintellectual movementsによる。政治上の変化が外的影響によって速められただけである。もともと維新論争は今日でも興味ある話題になっている。

次に取り上げるのはこの章に出てくる日本人のもっとも優れた国民性として自分が間違っていたときや劣っていると分ったときの「改善に進取」な気性のことである。そのことでグリフィスは「当時の指導者にこの気持ちがあったからこそ、一度は破棄した信頼を

回復し、一度は培った信頼を破棄した」といつてゐる。(This led the leaders to preach the faith they once destroyed, to destroy the faith they once preached.) faithには信頼という意味のほか、信仰、信条、誠意といった訳語がつくが、その原義は「信」(いつわらないこと)にある。問題はグリフィスが何をもち「信」としたかである。明治新政治の基礎となる誓約の「五箇条の誓文」にこの「信」の観念が具体化されていて、特にはじめの三条の「公論」「正義」「知識」において「信」に目覚めるよう宣言した。preachは解き明かすという意味があり、preach Christはキリストの道をとく意味になる。faithとpreachの二語はグリフィスが選んだ、維新革命を精神的にとらえた適切な言葉であると思われる。なぜなら西洋文明の導入という外からの刺激にもまして、これらの言葉は内からの衝動を表現しているからである。このような言葉の使用は観念的だが、それがかえって読者にグリフィスの文章のもつ深い意味を感ぜさせずにはおかなかつたと思われる。

IV グリフィスの文章

八十五年の生涯にグリフィスが著した書物は数も多いが、ジャンルも広い (prolific) のが特色である。日本の生徒のための英語テキスト出版に始まり、東京や横浜のガイドブック、自国や他国の歴史書、説教集、政治や宗教に関係する人物の伝記、日本やスイスなどの小国のおとぎ話にいたる筆力旺盛な作家であった。晩年のおとぎ話には老齢から来る郷愁を感じさせず。しかしMEはグリフィスの処女作である。三十歳過ぎの文章は若々しくて荒削りなどころがあるが、それだけに反って生木のごとく思うことを臆面もなく述べて怯まない、無垢な精神の旺盛なのが特色といえる。グリフィスの文学的素質のすばらしいことを言う書評もある。次に上げる文がそのことをよく物語っている。「著者の創造力は新語の使用やリアルなためにかなり不快な表現の前に怯むことがない」。歴史の記述は文学的表現といつてもよく、文体がその優劣を左右する。言葉によつて歴史的真相が浮き彫りにされる以上、歴史書を論じるときに表現される書評の言葉も豊富にならざるを得な

い。ME書評においてもその文章表現についての意見は重要な批評の一部であつて、それのない例はなく、むしろそれがなくては書評とはいえないといつても過言でない。文体にたいする審美眼の有無が批評家を決めるといつてよい。試みにほんの一部であるが評言の際に○好意的な意味の形容詞□批判的なものとで単純に分けて抜き書きする。

○erse vigorous simple unaffected candid
trustworthy modest careful precise accurate eloquent pure earnest □repuant desultory ornate turgid extravagant obscure dogmatic sophomoric
全体に好評で迎えられているなかで、The Mikado's Empireは「ハサミと糊を使って作成された」という盗作まがいの記事がC. Pfoundesの名前でニューヨーク発行のThe Worldに出た。Pfoundesには『扶桑耳袋』1875、『子供昔話』の著書があるが、MEはそれらを下敷きにして書いてあると中傷しただけでなく、「序文」に謝意のないことがPfoundesの逆鱗にふれたのである。この英国人は日本在住十四年、流暢な日本語を話すことから雇いの外国人を低く見るようになっていた。グ

リフィスが借用したと名 *Fu-so Mimi Bukuro* は *The Japan Weekly Mail* に無記名で連載中であった。グリフィスはこの投書の記事ではじめてその人物の名前を知って、*The World* に「すばらしい『耳袋』と『日本昔話』から受けた恩義に謝辞」の文を発表した。引用が盗用かを巡ってグリフィスの誠意ある態度を垣間見たが、まだその頃は英国人の優越感が高く、*the American Mr. Griffiths* のような表現に見られるように独立百年の国から気鋭の著者による浩瀚でおもしろい日本歴史および日本人論が出版されたことは驚きであり羨望的であったに違いない。

V グリフィスの歴史認識

「世界認識の方法」という対談で、加藤典洋氏は「外にいる人間がどのように外から、内にいる人間によって生きられている事象を認識できるか」と問いかけている。「『群像』2002年1月号 対談者は吉本隆明氏」。グリフィスがMEでしたことはそれであった。つまりグリフィスは日本を国外に働きかけの歴史的交流のなかで認識しようとした。古くは信

長がイエズス会の布教を支持したこと、それは日本の支配者による最初の西洋認識になった。秀吉の南蛮貿易もそうである。グリフィスが朱印船の絵を見て、大きさはコロンプスの船に優り、性能は同時代のオランダ、ポルトガルのガリオン船に同じで、大砲が装備してあると分った。ガリオン船は3、4層の甲板大帆船、大砲は日本製の元込め砲であった。その航海は貿易であれ、地理上の発見や海賊行為であれインド、シャム、ビルマ、フィリピン諸島、南中国、マレー半島、北の千島列島にまで及んでいた。日本は勇敢で冒険好き、外国人と接触して探究心や研究心に目覚める人間の住む国に思われた。近くは開化思想と国民教育がまさに日本の近代化への動向を確実に成功させる時代として、それが政治家、学者、愛国者によって遂行されている。このことは廃藩置県、米欧使節の派遣、征韓論と日本の歴史上もつとも波乱万丈の時代のなかで教育の仕事に邁進したグリフィスにして言えることであった。

日本の近代化に貢献したこれらの人材の内32人の名前を挙げたなかで、グリフィスは朝

河貫一 (1873-1948) の業績について特筆した。(MEにある論文 *Japan A World Power* に於て) 日本人は自国に古代から伝わる真実を回避しようとする歴史感覚の欠如 (a lack of the historical sense) があって、神話などを權威のあるものとする足枷のために学問の自由 (academic freedom) が損なわれてきた。それはグリフィスが日本を古代から明治維新まで書くに当たって強く意識したことには他ならない。その唯一の例外が朝河貫一の英文による著書 *The Early Institutional Life of Japan: a study in the reform of 645 A.D.* (1903. pp.355, Tokyo) であった。朝河の歴史的記述に、おそらく、グリフィスは欧米人の考えに共通の歴史感覚を見出したのであろう。朝河貫一は福島県二本松に生まれ、福島尋常中学校から東京専門学校に入学、横井時雄より洗礼を受け、1896年に米國ダートマス大学留学。イエール大学大学院歴史学科に進学、1902年学位論文「645年の改革の研究」(前記英文)によりPh.D.を授与される。朝河の著書によると645年の大化の改新から1868年の王政復古にいたる天皇は熱狂的国民感情の鼓吹者であったが、モラ

ルの上での支配力(精神的統一)がなかった。大化の改新の天皇はひたすら神権の継承に走り、王政復古のときは非人格的存在となつて、国家意識(nationality)の統一の力と見做された。日露戦争終結後の論文 *Japan A World Power* でグリフィスが提唱した *Christian Bushido* は支配者にモラルのない危惧を感じた造語であつて朝河貫一の歴史感覚からの影響があつたと見られなくもない。

このように見てくるとM田は一外国人による広い分野の日本研究書であり、今日でいう学際的研究の色彩をもつ作品であるように思われる。最後になつてミカドの神性についての歴史的考察という厄介で重要な問題が残つた。これはグリフィスにとつても最大の課題であつた。機会を見てそれは論ぜられたが、概して困難であるが故に混迷に陥っているのは仕方ないことであつた。しかしグリフィスは後に尾を引く言葉を述べている。「皇室の威信の強さを計算に入れず、ミカドの玉座が国民の胸中を占めていることを認めずに日本人の独特な歴史を研究しようとしても、日

本人とその生活を理解することは決して出来ない」。The *Mikado's Empire* 出版からかぞえて40年後、グリフィスはThe *Mikado* (1915)を上梓した。南校の教授であつた1872年5月7日、明治天皇がグリフィスの実験授業を参観、東京開成学校開校式に再び明治天皇がグリフィスの実験授業を参観するということがあつた。一参考。「グリフィスと日本」の「グリフィスの見た明治のミカド」。

ワシントン駐在の日本公使吉田清成(1845~1891)はグリフィスから明治天皇にThe *Mikado's Empire* を献呈したい旨を伺う手紙をもつた。吉田は1868年にラトガース・カレッジに入學、4ヶ月の在學であつたが、そのとき以来グリフィスとは旧知の仲であつた。1876年9月18日付の吉田の手紙によると、天皇への献本は通例のことではないので、著者による献呈の気持ちを添え書きしてほしい、またグリフィスの勧めで吉田がM田と著者についての簡単な説明も書き添えたとあつた。グリフィスの願いは聞き届けられた。1877年1月31日付の吉田清成の手紙にはこう記してあつた。「著書The *Mikado's Empire* 一冊を天皇陛下

に献呈の貴兄のご依頼は、三、四ヶ月前、滞りなく受託されました。陛下への贈呈は外務局の大臣によって行われました。陛下にはご著書を受理されてご満悦のご様子でした。そのことを貴兄にお知らせできることは大きな喜びです」。

The *Mikado's Empire* は書評というマスコミユニケーションの力を借りて米国人読者のあいだに大きな反響をもたらした。つまりこの書物を読むことで十九世紀も四分の三を過ぎる米国で、日本についての知識に目覚める人が続々と出現してきたのである。もちろんその数は知れたものであつたらうし、今、その反響の実態を具体的に調べることはしない。しかしそれが他国のことであつても、日本人にとつてうれしい社会現象であつたに違いない。ひるがえつて実際、M田は日本のいわゆる知識人のあいだにどのような反響があつたのだろうか。確かに彼らは読んでいた。知りたいのは読んでどう思ったのか。それが分らないのである。グリフィスがその日本著書で理想にしている「和解」を感じる日本人はいたはずである。それでなくてもその書物を

読んで「批評」した日本人はいたはずである。反応らしきものが現れてこない。真の意味での「書評」のない国であるか日本は。

ミカドスインハイア 代價四圓
 皇國實記
 右ノ書籍ハ曩ニ東京ノ公立大學校ノ教頭
 マリシ米人ウヰルリアム、イ、グリブス氏
 ノ著述スル所ニシテ極メテ日本ノ事情ヲ
 精細ニ記載シ最モ最近ニ成レル著書ナン
 ハ有識ノ君子ハ必ラス坐右ニ缺クヘカラ
 サル頁書ナリ且ツ中事寫眞書等ヨリ寫セ
 ル一百有餘ノ珍畫ヲ挾ミ實ニ日本ノ事情
 ヲ記載セシ横文畫中未ダ曾テ見サル所ノ
 珍書ナレハ四方ノ諸彦幸イニ弊店ニ御注
 文アラソコヲ伏願ス

十月 日 横濱本町通り二十八番
 賣弘所 ウイトモ、ル、コシヘニ
 芝柴井町十九番地
 支店 半田 研吉

朝野新聞1876年10月24日広告

山下 The Mikado's Empire 出版の反響

The Mikado's Empire.

The Mikado's Empire. Book I. History of Japan, from 660 B.C. to 1872 A.D. Book II. Personal Experiences, Observations, and Studies in Japan, 1870-1874. By WILLIAM ELLIOT GRIFFIS, A.M., late of the Imperial University of Tokio, Japan. Copiously Illustrated. 8vo, Cloth, \$4 00.

Professor Griffis's volume will be welcomed as a valuable addition to the Japanese library, presenting the most recent, probably the most authentic, and in many respects the most complete information concerning the peculiar and interesting people of whom it treats. The matter of the work is of sterling merit. —N. Y. Tribune.

Mr. Griffis had unusual opportunities for studying the character of the people and of their government, and he has presented his views of them in such an interesting as well as instructive manner that his book will be warmly welcomed. —Boston Globe.

The resources of thorough scholarship have been brought to the support of personal researches of a very close and exhaustive nature. The style of narration is graphic and pleasing, and the matter impresses the reader as having been written from an intimate standpoint. —Boston Post.

It is seldom that a remote history is made so readable, and no common merit and facilities have been engaged in the moulding and linking of the chapters. Fascinating as a fairy tale is the historical portion of the work. One is led irresistibly from chapter to chapter, informed by facts—facts which have long been myths to the world outside of the Island Empire—and pleased with myths, from which the facts have sprung, until the history of Japan, so long unknown, becomes an unriddled enigma, thanks to one whose residence and popularity among the people has served to yield us this authentic story. —Philadelphia Press.

A really thoughtful and interesting book on a fascinating subject. —Christian Intelligencer.

The most comprehensive as well as the most reliable work upon Japan thus far written. —Boston Transcript.

Остябрь, 1876.—No. 317.

The Mikado's Empire 出版広告 (6紙の批評文がつく)